

# 平城京左京一条三坊五坪の井戸と出土土器

池田裕英

## I 平城京左京一条三坊五坪（市H J 第520次）の調査

平成 16 年度に奈良市法華寺町で実施した市 H J 第 520 次調査では、削平された古墳を検出し、佐紀古墳群に関する新たな知見を得た。この法華寺垣内古墳は全長 110 m 程度の前方後円墳に復原でき、出土した埴輪などから 5 世紀中頃に位置づけることができる。この調査の概要は『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 16 年度』に報告しているが、出土遺物についてほとんどふれることができなかったため、出土した埴輪は『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 18 年度』に「法華寺垣内古墳とその埴輪」として出土資料の紹介をおこなった。

この調査では、古墳以外にも奈良～平安時代の掘立柱建物や土坑、石敷遺構、井戸、鎌倉時代の掘立柱建物、井戸などを検出した。特に奈良～平安時代の井戸からは良好な土器資料が出土していることから、ここでその井戸と出土土器の紹介をしておきたい。

この市 H J 第 520 次調査を行った場所は、平城京の条坊復原では左京一条三坊四・五坪にあたる。この調査は宅地造成に伴う事前の発掘調査で、開発予定地のうち道路や調整池になる部分に 5 つの発掘区を設けて実施したものである（図 1）。

今回紹介する井戸 S E 05 とそこから出土した土器は、敷地南東隅部に設けた第 1 発掘区で検出した（写真 1・図 3）。この発掘区では、掘立柱建物・掘立柱列等を検出したが、柱穴は多数みつかったものの、建物・塀としてまとまるものは少ない。埋土から瓦器が出土した柱穴もあり、平安～鎌倉時代の建物もある。これらの遺構の他、古墳の葺石や周濠を利用したと思われる石敷や溝状の遺構も検出している。これらの遺構からは奈良時代～平安時代初頭の土器が出土しており、その頃の遺構であることはわかるが、性格は不明である。

井戸は発掘区南端付近で検出し、古墳の周濠を埋め立てた整地土を掘り込んで作られている（写真 2）。周濠は、埋土やそこから出土した遺物等からみて、平城京造営に伴いこの辺りを造成する際に古墳の墳丘の土を削って埋め立てられたと考えている。

井戸の西側には、東西 2.8m、南北約 5 m の範囲に石敷がある（図 2）。石敷は西から東に向かって緩やかに下る。この調査では、他の 2 箇所の発掘区で古墳の葺石を検出している。その箇所での墳丘葺石の角度と比べて、この石敷の傾斜が緩やかであることや基底石と思われる

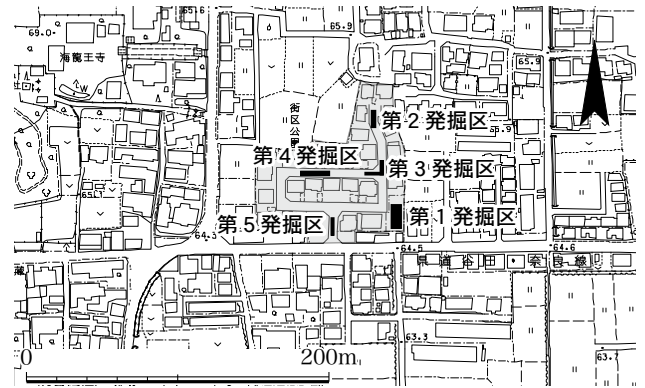


図 1 H J 第 520 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



写真 1 第 1 発掘区全景（北から）



写真 2 井戸 S E 05 と石敷遺構（西北から）

石がないことから、この箇所は古墳の葺石を置き直し、何らかの目的で井戸が作られる以前に古墳の周濠と葺石を利用した遺構があったと考えている。周濠埋土・石敷覆土の珪藻・花粉分析をおこなった結果、遺構は湿った土壤環境で、滞水はしておらず湿地のような状態であったことがわかった。石敷上や周濠埋土からは埴輪とともに奈良時代～平安時代の土器、陶器、軒瓦、轆の羽口、埴塼といった遺物出土した。井戸の掘形は石敷を壊して掘られているが、掘形断面の観察で上段の井戸枠の西



図2 井戸 S E 05 平面・立面図 (1/50)

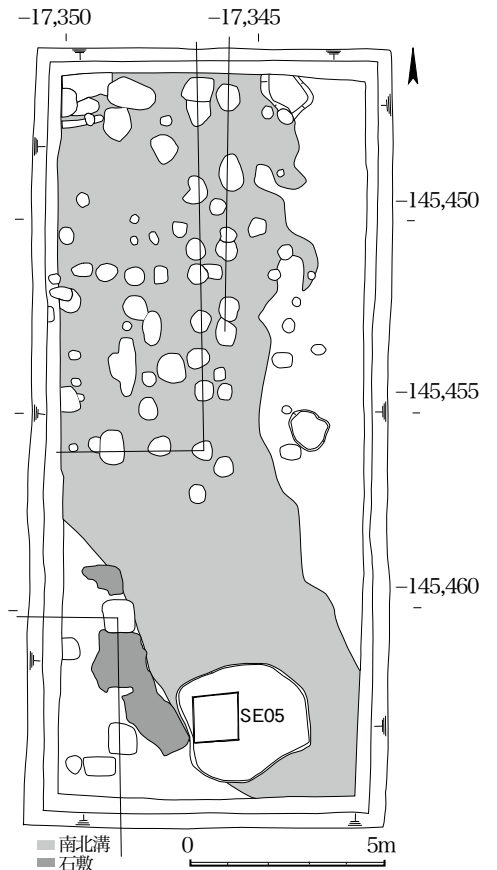


図3 第1発掘区平面図 (1/200)

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1 暗灰黒色土・灰色粘質土混合土 | 12 黒色粘質土        |
| 2 灰色砂            | 13 暗灰緑色土        |
| 3 青灰色粘土          | 14 青灰色砂質土       |
| 4 灰褐色砂質土・青灰色土混合土 | 15 暗黒灰色土        |
| 5 灰褐色砂質土         | 16 暗灰緑色土        |
| 6 灰黒色粘土・灰褐色土混合土  | 17 灰緑色粘質土       |
| 7 青灰色土・灰褐色土混合土   | 18 青灰色粘土        |
| 8 黒色腐植土          | 19 灰緑色粗砂        |
| 9 暗黒灰色土          | 20 灰緑色土・橙黄色土混合土 |
| 10 暗茶黒色土         | 21 暗灰緑色砂質土      |
| 11 黒色土           |                 |

に接する位置にある石・埴がいずれも水平にあったことから、人為的におかれたものと判断し、一時期、井戸と石敷とは併存していたと考えている。また、井戸の西側に一辺約1mの柱掘形を南北に2つ（柱間3m）検出している。これより東側に柱掘形がないことから、掘立柱建物の北東隅と考えている。柱掘形からは小片の土器が出土したのみで詳細な時期は不明であるが、石敷を壊して掘られていることもあり、井戸と併存していた可能性もある。

## Ⅱ 井戸 S E 05 について

井戸の掘形は東西3.2m、南北3.1mの不整円形で、断面形は2段掘りになっており、上部はやや広めに、下部はそれより狭まり杵材をほぼ収めることができる程度の大きさに掘られている。深さは2.6mである。

井戸杵は掘形の西に寄った位置に据えられている。杵材の一部に断面が山形をした材が使われており、後述のように屋根材とみられる（写真3）。井戸杵は上下2段になっており、いずれも横板を井籠組で正方形に組んでいる。上段は内法一辺1.1mで7段（1.5m）、下段は内法一辺1.0mで5段（0.9m）が残存していた。杵材は幅0.15～0.3mである。掘形の底部には平瓦や石を置き、その上に横板が置かれている状態であった。

杵に用いられた板材は全部で43枚あるが、屋根材とみられる断面が山形をした材は8枚あり、上段の杵にも下段の杵にも使われていた。これらの材は長さ113～114cm、幅23～26cm、厚さ4～5cmである。いずれの材にも釘穴がみられる（図4）。このような断面が山形の屋根材は、現存する建物では法隆寺五重塔の裳階の

大和葺にみられ（写真4）、遺跡からの出土例では大阪市の細工谷遺跡からの出土資料がある<sup>11)</sup>。細工谷例は、長さ209.5cm、幅30cm、厚さ3.5cmで、材質はスギである。本遺跡から出土したこの杵材は形状からみて大和葺の下板と考えられる。大和葺は板葺き屋根の一種で、板を上下に両端が重ね合わさるように置き、上板は凹部を下に向け、下板は凹部を上に向けて置く。水の流れをよくするための工夫と考えられているようである。出土材も板の上を水が流れたためか、上面は摩滅がみられるが、西3段目の材のように稜線が明瞭に残っているものもある（図4下）。山形の材を大和葺きの下板と考えてよいのであれば、これと組み合わせるとみられる▲型の上板にあたる材は出土していないが、釘穴がある杵材は他にもあり（端部を削り取ったような痕はない）、このような平らな板を上板として用いていたかどうかはわからないものの、これらも屋根材であったのかもしれない。この坪にこれらの材を用いていた板屋根の建物があったのであろうか。

### Ⅲ 井戸 S E 05 出土土器について

掘形、井戸杵内あわせて遺物整理箱にして7箱分の遺物が出土した。土器の他、丸瓦、平瓦、軒丸瓦（6132A・6138B・複弁6弁蓮華紋軒丸瓦（姫寺廃寺同範））、軒平瓦（6767A）、轆の羽口や埴塼等の铸造関係遺物が出土している。以下で出土した土器について記す（図5）。（1）掘形出土土器 掘形からは遺物整理箱で4箱の土器が出土した。出土土器は土師器には杯A、皿A、碗A・C、高杯、須恵器には杯蓋、杯A・B、皿A・Bがある。破片が多く、全形や調整手法のわかるものは少ない。

#### 土師器（1～13）

杯A（1～3）では、3が口径17.8cm（復原）、器高3.6cmで、底部外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデしたのちヘラミガキしている。口縁部内面には2段の斜放射状暗文が施されている。

皿A（4～7）は7が口縁部内外面をヨコナデ、6が底部外面をヘラケズリ、口縁部下半はヘラケズリののちヘラミガキ、口縁部外面から内面はヨコナデ、5が口縁部外面をヘラケズリで調整する。これらの皿Aは時期の異なるもので、6・7はやや古い様相を、4・5は新しい様相を示すものであろう。

碗A（8～11）は小破片が多いが、11は口径が13.2cmに復原できる。図示したものはいずれも口縁部外面をヘラケズリするc手法である。

碗C（12）は摩滅のため調整は不明である。口径は13.2cm（復原）である。



写真3 S E 05 井戸杵北面部分（北から）

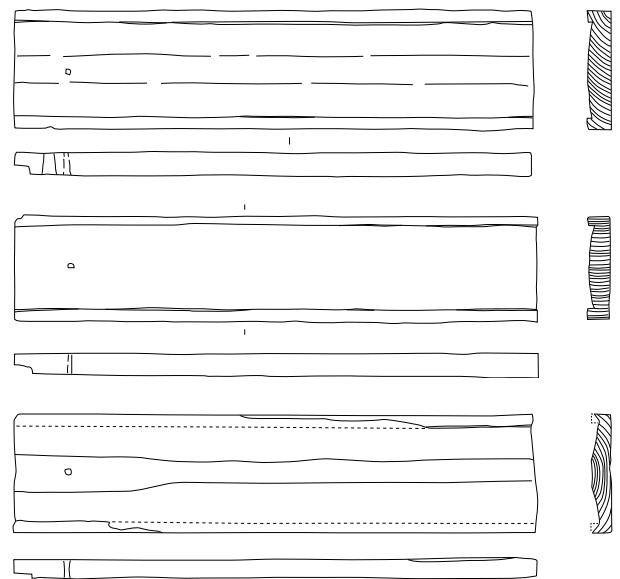


図4 井戸杵材模式図（上：北5段目・中：南4段目・下：西3段目）



写真4 法隆寺五重塔裳階大和葺

高杯（13）は皿部の口径が16.4cmに復原でき、9面に整えられた短い脚部が付く。皿部は口縁部外面がヘラミガキ、内面に斜放射状暗文が施されている。

#### 須恵器（14～18）

杯蓋（14）は縁部が屈曲するA形態で、調整は内外面ともヨコナデである。口径は18.0cmに復原できる。

杯 B は 15 が口径 8.6 cm、器高 3.5 cm、16 が口径 16.6 cm に復原できる。いずれも調整は内外面ともロクロナデで、底部と口縁部の屈曲部近くに高台が付く。

皿 B (17) は口径 23.1 cm (復原)、器高 3.8 cm、高台径 19.4 cm (復原) である。高台は底部と口縁部の境からやや内側に入った位置に付く。調整は口縁部はロクロナデ、底部内面は不定方向ナデ、底部外面はロクロケズリである。

皿 A (18) は口縁端部を内側に肥厚させる。口径は

26.2 cm (復原) である。底部外面はロクロケズリのちロクロナデを施している。内面に火襷がみられる。

掘形から出土した土器は、平城宮土器Ⅱ・Ⅲの特徴を示すものもあるが、土師器の形態や調整手法などからみて 8 世紀末～9 世紀初頭のものと思われ、井戸が構築された時期もその頃と考えられる。

(2) 枳内出土土器 枳内から出土した土器は、土師器には杯蓋、杯 A・B、皿 A、碗 A、甕、羽釜、甕、須恵器には杯蓋、杯 A・B、皿 A、碗、壺蓋、壺 A・M、

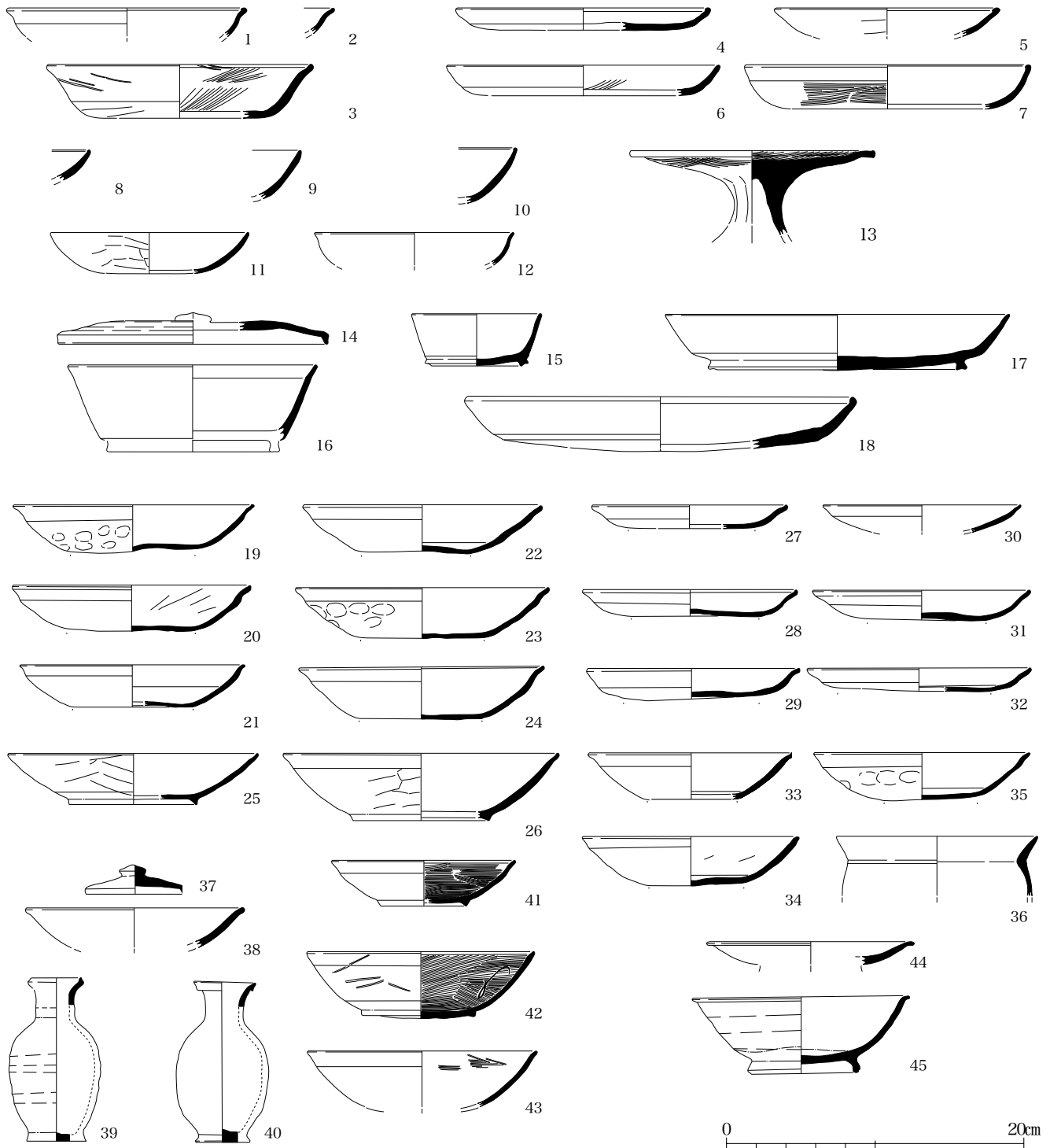


図5 井戸 SE05 掘形 (1～18)・枳内 (19～45) 出土土器 (1/4)

甕、黒色土器には杯、碗、緑釉陶器皿、灰釉陶器碗、製塩土器がある。破片数で228片で、その内訳は表1のとおりである。比率でみると須恵器の比率が高いが、これは甕の破片数が多いことによるもので、杯・皿・碗の食器類でみると表3のように土師器が6割を占め、黒色土器、須恵器が約2割ずつとなっている。

#### 土師器 (19～36)

杯A (19～24) の口縁端部の形態には内側に小さく肥厚させたものと、丸くおさめたものとがみられる。口径でみると15.0cm (21) のものと15.9cm (20) ～16.9cm (23) のものとの二群がある。器高は2.9cm (21) ～3.5cm (24) である。調整は口縁部を強くヨコナデするe手法のもの、口縁部下半にユビオサエによる指頭圧痕が明瞭に認められるものが多い。20の口縁部内面には斜め方向の工具痕が、底部内面には板状工具によるとみられるハケ目のような工具痕が残る。これ以外のほとんどのものは内面の調整は口縁部がヨコナデ、底部が不定方向ナデである。

杯B (25・26) は外面をヘラケズリで調整している。高台は接地面が尖り気味の逆三角形のような断面形状である。25は口径16.6cm (復原)、器高3.5cm、26は口径18.5cm (復原)、器高4.5cmである。他の杯・皿・碗と比べると、口縁部のヨコナデはそれほど強くない。

皿A (27～32) には杯Aと同じように口縁部を内側に肥厚させたものとまるくおさめたものとがみられる。口径13.0cm (27) ～13.2cm (30) のものと14.3cm (28) ～14.9cm (32) の二群にわけることができるようである。器高は1.6cm (27) ～2.0cm (31) である。外面の調整は口縁部をつよくヨコナデし、口縁部下半はナデを加えているのみで、部分的にユビオサエによる指頭圧痕がみられる。形態は幅の広い平らな底部に口縁部が斜め上方に立ち上がるものであるが、30は底部と口縁部の境がやや不明瞭で、他の皿とは異なる形態である。

碗A (33～35) は口径13.7cm (33) ～14.4cm (34・35)、器高3.1cm (33・35) ～3.3cm (34) である。いずれも口縁部をつよくヨコナデしている。35の外面の口縁部下半にはユビオサエによる指頭圧痕が残り、34の内面にはコテのようなものを使用したと思われる工具痕がみられる。

杯A・皿A・碗Aは内面にヨコナデが明瞭に残り、それをみると、土器を正位置に置いたと仮定した場合、碗を時計方向に回していることがわかる。

36は土師器甕である。口縁部をヨコナデするが、底部以下は摩滅が激しく調整は不明である。

#### 須恵器 (37～40)

37は壺蓋である。外面には暗灰緑色の自然釉がかかる。調整はロクロナデである。口径6.5cm、器高1.9cmである。尾張産と考えられる。

38は杯もしくは碗の口縁部である。口径は14.6cm (復原) で、調整はロクロナデである。口縁部上半に重ね焼きの痕跡がみられる。

壺M (39・40) はいずれも平高台で外面に糸切り痕がみられる。口縁部は上半が外反し、39は端部を上方へつまみあげているが、40は端部下半を下方に引きだしている。口縁部、体部内外面とも調整はロクロナデである。

#### 黒色土器 (41～43)

いずれも内面に炭素を吸着させる黒色土器A類であるが、炭素の吸着は口縁部外面にまで及んでいる。41・42は高台が付くが、43は不明である。42は内外面ともヘラミガキを施しているが、外面のヘラミガキは粗い。内面に螺旋状のヘラミガキを加えている。他の2点は外面の摩滅が激しく調整は不明である。口径・器高は、41が12.2cm (復原)・3.1cm、42が15.2cm・4.5cm、43が15.3cm (復原) である。

表1 SE 05 枠内出土土器の構成

種類	器種	破片数	比率 (%)
土師器	杯蓋	1	1.1
	杯A	13	14.5
	杯B	2	2.2
	皿A	13	14.5
	碗A	10	11.1
	杯カ皿	10	11.1
	杯カ碗	8	8.9
	甕	17	18.9
	羽釜	1	1.1
	竈	1	1.1
	製塩土器	3	3.3
	不明	11	12.2
小計		90	100
須恵器	杯蓋	6	5.1
	杯A	1	0.8
	杯B	1	0.8
	杯AカB	2	1.7
	皿A	1	0.8
	杯カ皿	5	4.2
	杯Bカ皿B	2	1.7
	壺蓋	1	0.8
	壺M	2	1.7
	甕	94	79
	不明	4	3.4
小計		119	100
黒色土器	杯カ碗	2	11.8
	碗B	4	23.5
	碗	11	64.7
小計		17	100
緑釉陶器	皿	1	100
小計		1	100
灰釉陶器	碗	1	100
小計		1	100
合計		228	100

表2 種別ごとの構成

種別	破片数	比率 (%)
土師器	90	39.5
須恵器	119	52.2
黒色土器	17	7.5
緑釉陶器	1	0.4
灰釉陶器	1	0.4
合計	228	100

表3 食器類の構成

種別	破片数	比率 (%)
土師器	57	60.6
須恵器	18	19.1
黒色土器	17	18.1
緑釉陶器	1	1.1
灰釉陶器	1	1.1
合計	94	100

## 緑釉陶器 (44)

皿である。高台付近から下部を欠損しているが、高台が付いた痕跡は残っている。調整は外面がロクロケズリ、内面はヘラミガキが施されている。口径は14.0cm(復原)である。京都産であろう。

## 灰釉陶器 (45)

碗である。口径14.5cm、器高5.2cm、高台径7.5cmで、底部外面をロクロケズリしている。内外面ともハケ塗りにより施釉されている。美濃産と考えられる。

## IV 土器の時期や特徴に関する考察

ここまで個々の土器について概述してきたが、以下で枠内出土の土器群の時期や特徴についてみていくこととしたい。それにあたって最も有用なのは土師器食器類であろう。

杯Bを除くと、外面をヘラケズリするc手法で調整しているものはほとんどなく、口縁部を強くヨコナデするe手法の土器が多数をしめる。

食器類の法量は、以下のように

杯A I	口径 15.9 ~ 16.9cm	器高 3.1 ~ 3.5cm
杯A II	口径 15.0cm	器高 2.9cm
杯B I	口径 18.5cm	器高 4.5cm
杯B II	口径 16.6cm	器高 3.5cm
皿A I	口径 14.3 ~ 14.9cm	器高 1.6 ~ 2.1cm
皿A II	口径 13.0 ~ 13.2cm	器高 1.6cm
碗A	口径 13.7 ~ 14.4cm	器高 3.1 ~ 3.3cm

となっている。法量分布(図6)をみると、杯・皿では大・小二群の法量分化をみてとることができる。また、形態の違いという点から杯・皿・碗の図を重ねあわせてみたのが図7である。皿は器高が低いので杯・碗とは明瞭に区別することができる(←位置)。杯と碗とは、法量が近似するものでも底部から口縁部への立ち上がりの位置が異なっていることをみてとることができ(▲位置)、形態でも杯・皿・碗を分けることはできるようなのである。参考として、これを数値化して示したのが表4である。出土点数が決して多くはないので量的な問題はあろうかと思われるが、径高指数をみると、杯A・碗Aは19~23の範囲の数値を示すが、皿Aは10~15となっており、これによって杯・碗と皿とを分けることができそうである。また、杯と碗については底径を測り、外傾指数<sup>3)</sup>を用いた。底径を測る際、底部と口縁部との境の区切りについては、本土器群では土器や実測図から立ち上がり部をみてとることが比較的明瞭と思われるが、あわせて土器の外傾線の傾きの変化量を計り、それが大きく変化し始める箇所を求めた。そうすると、杯Aとした

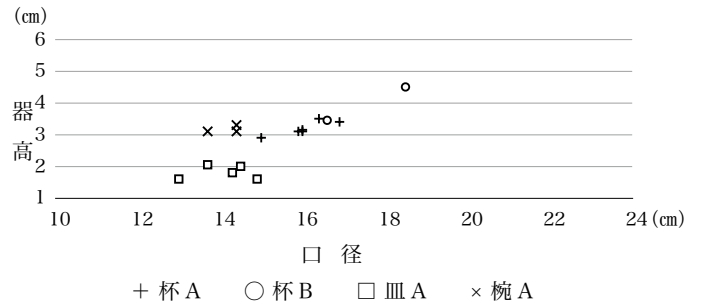


図6 S E 05 枠内出土土師器食器類の法量分布

表4 S E 05 枠内出土土師器杯・皿・碗の法量

図版番号	器種	口径*	器高*	底径*	径高指数	外傾指数
19	杯A	16.0	3.2	8.3	20.0	51.9
20	杯A	15.9	3.1	8.5	19.5	53.5
21	杯A	15.0	2.9	8.2	19.3	54.7
22	杯A	16.0	3.1	7.3	19.4	45.6
23	杯A	16.9	3.4	8.2	20.1	48.5
24	杯A	16.4	3.5	8.2	21.3	50.0
27	皿A	13.0	1.6	8.4	12.3	64.6
28	皿A	14.3	1.8	8.5	12.6	59.4
29	皿A	13.7	2.1	9.0	15.3	65.7
31	皿A	14.5	2.0	8.0	13.8	55.2
32	皿A	14.9	1.6	10.2	10.7	68.5
33	碗A	13.7	3.1	5.9	22.6	43.1
34	碗A	14.4	3.3	6.3	22.9	43.8
35	碗A	14.4	3.1	6.2	21.5	43.1

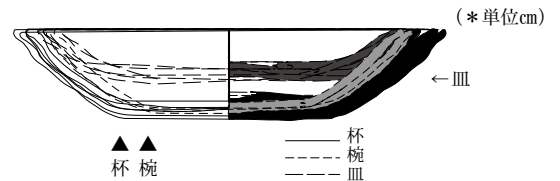


図7 杯・皿・碗の重ね合わせによる形態の比較 (1/3)

ものが45~53の、碗Aとしたものが43.1~43.8の数値となった。ただし、図5・表4でもこの中間に位置するようなものもみられ(図5-22)この時期以降、杯と碗との法量の顕著な差がみられなくなってくる傾向がより強くなることもあり、その区別が難しくなるが、その特徴を示しているものであろう。

この土師器と共伴した施釉陶器は、緑釉陶器が栗栖野<sup>5)</sup>13号窯段階で9世紀第2四半期頃、灰釉陶器が美濃窯<sup>6)</sup>光ヶ丘1号窯式期で9世紀第4四半期頃のものと考えられる。

以上のように調整手法、法量に注目し、奈良市内で調査された同じような時期の資料の中から類例を探すと、平城宮第15次調査SK1623出土土器(以下、宮SK1623と略記)<sup>7)</sup>、東大寺西南院S E 04出土土器、史跡大安寺旧境内第60次調査S K 05(以下、DA60-SK05と略記)<sup>8)</sup>があげられる。これらは9世紀後半~10世紀初頭に位置づけられている資料である。宮S K 1623とD A 60-S K 05の杯・皿・碗の法量分化の様子についてはS E 05の数値とともに表5に示したとお

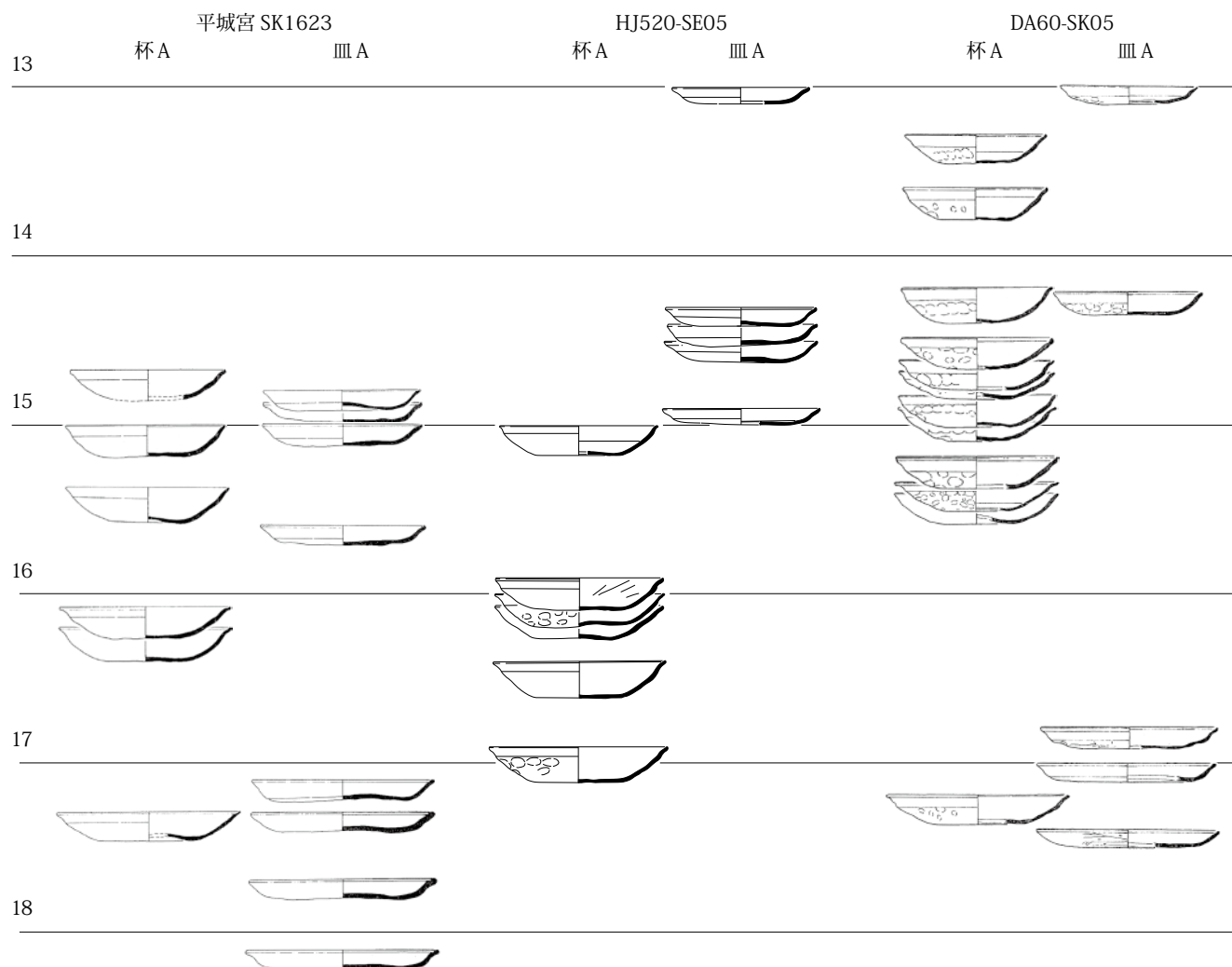


図8 宮SK1623・HJ520-SE05・DA60-SK05出土杯・皿の法量比較（単位cm）

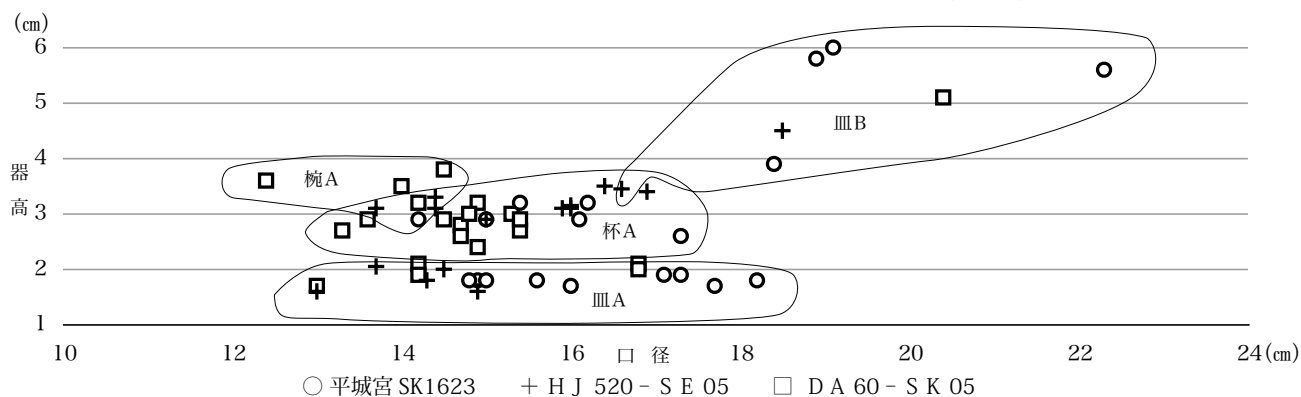


図9 宮SK1623・HJ520-SE05・DA60-SK05出土杯・皿・碗の法量分布

りで、これらの土器群との比較をおこなってみたい。

宮SK1623出土土器は、個体数で368個体の土器が出土しているが、その内訳は土師器86.8%、須恵器2.0%、黒色土器6.2%、中国製陶磁器0.5%、灰釉陶器3.5%、緑釉陶器1.0%となっている。器種では報告書によると碗Aがないが、図示されている資料をみると碗Aとしてよいと思われるものもある。これは当該期にみられる杯と碗との区別の困難な器形の土器であろう。杯Aは個体数でみると、口径14.0～15.5cmの杯A IIと

13～14cmのA IIIが多くを占める。皿Aは口径17～18cm台の皿A Iと14～15cm台のA IIとがみられるがA IIが主体となっている。調整は多くがe手法で、e-c手法のものが少量出土している。灰釉陶器は尾張産のK-90号窯式のものが共伴している。

DA60-SK05出土土器には、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁が出土しており、比率は不明であるが、この順で多いようで、食器類のほとんどが土師器である。土師器杯A・皿Aは、とも

表5 各遺構出土の杯・皿・碗の法量

	宮SK1623	HJ520-SE05	DA60-SK05
杯A I	16~17	15.9~16.9	17.0~17.3
II	14.0~15.5	15.0	16.0~16.6
III	13~14		14.0~15.4
IV			12.2~13.4
皿A I	16.8		18.2
II	14.6~15.3	14.3~14.9	16.2~17.3
III			13.6~15.6
IV			11.4~12.8
碗A I		13.7~14.4	13.6~14.2
II			12.4~14.2

に口径が17~18cm台のやや大きいものが出土しているが、量的に多いのは15~16cm台のものである。また、器厚がうすく口縁部も開き気味で、口縁部のヨコナデが強いものもみられる。調整手法は杯・皿・碗ともe手法のものが主体であるが、皿Aの17cm台のものにe-c手法を用いている一群がある。碗Aはe手法である。共伴した灰釉陶器はK-90号窯式のものとはK-14号窯式のものとは異なるが、前者が多い。

奈良時代後半から平安時代前半にかけての土師器食器類の変化は、基本的には法量が縮小し口径の大きいものが減少していく、調整手法の簡略化が進み器厚が徐々に薄くなっていく方向性にあるといつてよいであろう。杯と碗とは法量からも形態の区別が困難となり、口縁部の開きが強くなっていく傾向がみられる。これらの点から上記の資料をみると、HJ520-SE05 枠内出土土器は図8で示したように法量をみても宮SK1623とDA60-SK05との中間的な要素があると考えられる。HJ520-SE05とDA60-SK05とを比べたとき、杯・皿に口径の縮小化がみられることや杯と碗との形態の区別が困難なもの、杯・皿の器壁がより薄いもの、口縁部のヨコナデがより強いものがDA60-SK05出土土器により多くみられることなどもその理由である。そうすると、このHJ520-SE05 枠内出土土器は9世紀後半~末頃の年代が与えられると考える。掘形出土土器が8世紀末~9世紀初頭と考えているので、井戸が使用された期間は約100年間となろうか。

SE05出土土器には、宮SK1623・東大寺西南院SE04・DA60-SK05にみられる口径が16~17cm台の皿Aがない。また、緑釉陶器の皿はこの時期の土器群と共伴している緑釉陶器と比べると、口縁端部がやや厚いなどの点から古い様相を示しているものと思われる。緑釉陶器の使われ方が他の遺構出土のものとは違っていたとも考えられる。宮SK1623が平城宮という宮殿、DA60-SK05が寺院で使用された土器群であることを考えると、これらの点は使用された機関・施設などの

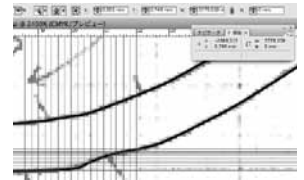
違いを考慮する必要があるのかもしれない。

## V おわりに

この調査をおこなった場所は平城宮から東に約500m程のところで、宮からもそう遠くない。この付近では左京一条四坊の調査で検出した東三坊大路の側溝（SD650）から9世紀後半~10世紀初頭の土器が<sup>11)</sup>、左京一条三坊十三坪の井戸枠内から9世紀中頃~10世紀前半の土器が混在して出土している。古代の大和-山城を結ぶコナベ越えといわれる当時の幹線道路にも近い。そういう場所で平安時代の井戸や石敷遺構を検出し、新たな土器資料を加えることができたことは、長岡京遷都以降における平城宮東方の佐紀・佐保といった地域の土地利用を考えるうえでも興味深いことと考える。

註)

- 1) 李 陽浩・岡村勝行「『百済尼寺』の屋根材か？」(財)大阪市文化財協会『葺火』第70号 1997
- 2) 器高/口径×100で計算。
- 3) 器高/底径×100で計算。なおこの用語について、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ』1962で、口縁の外傾度を示す指数として外傾指数を用いているが(P90・91)、算出するに際して「口縁の外傾度を示す指数は口径乃至器高に対する底径の比率によるのが理想的だが、底部と口縁部の境界が不明瞭だから、できるだけ底に近くへら削りの影響をあまりうけないと考えられる器高1/3の高さにおける距離を底径に代用した。」とある。本稿では底径を測り、数値を求めたことから「外傾指数」の用語を用いることとした。なお、本来必要であろう検定は行っていない。
- 4) 底部と口縁部の境界を区切るに際して、外形線を底部中心から2mmごとに高さの変化量を計測し、変化量が大きく変わり始めた位置を境界とした。これにはadobe Illustratorを使用し、下図のようにグリッドとガイドを使って数値を読み取った。



- 5) 高橋照彦「平安京近郊の緑釉陶器生産」古代の土器研究会第7回シンポジウム『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器-生産地の様相を中心に-』古代の土器研究会 2003
- 6) 齋藤孝正「東海地方の施釉陶器生産-猿投窯を中心に-」古代の土器研究会第3回シンポジウム『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東3 施釉陶器-』古代の土器研究会 1994
- 7) 奈良国立文化財研究所 奈良国立文化財研究所学報第42冊『平城宮発掘調査報告XⅡ』1985
- 8) 奈良国立文化財研究所『昭和54年度 平城宮跡発掘調査部概報』1980
- 9) 奈良市教育委員会「1 史跡大安寺旧境内の調査 (1) 僧房跡 西太房の調査 第60次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994
- 10) 三好美穂「南都における平安時代前半期の土器様相-土師器の供膳形態を中心とした編年試案-」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1995』奈良市教育委員会 1996
- 11) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1975
- 12) 奈良市教育委員会「4. 平城京左京一条三坊十三坪の調査 第440次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成11年度』2001